

# 短期大学教育資源を活用したアウトリーチ活動による 地域貢献効果に関する研究

石上 浩美\*・東 景子\*\*

Research on regional contribution effects through outreach activities using  
junior college educational resources

Hiromi Ishigami, Keiko Higashi

【キーワード】 大学教育資源, アウトリーチ, 地域貢献  
University Educational Resources, Outreach,  
Effects of community contributions.

## 1. 問題と目的

### (1) 本研究の背景

中央教育審議会（2021）<sup>1)</sup>によると、地域における大学の役割は、1）地域に必要な不可欠な人材の育成、2）高度な研究能力、3）地域の文化歴史を発展継承、4）知と人材のハブ、の4点に集約される（図1）。そして、大学には自学に在籍する学生のための教育・研究機関であると同時に「地域の中核となる大学」となることが期待されている。

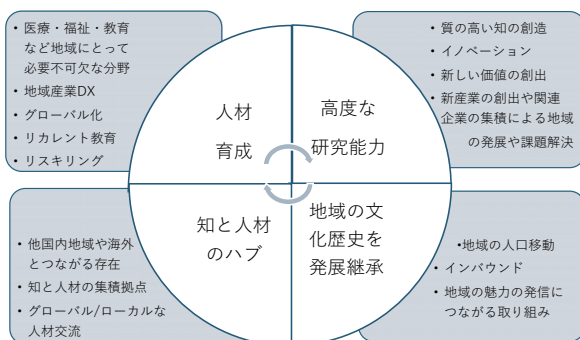


図1 地域における大学の役割

（中央教育審議会，2021 を基に著者作成）

では、このような社会からの期待に応えるために大学にできることはどのようなことだろうか。また、大学が持つ知的・人的・物的資源は、地域活動においてどのような有用性・有益性があるのだろうか。

大学には、Society5.0 社会における生涯学習拠点として、地域の活性化を担う社会的役割と責務があると考えられる。これを果たすためのひとつの方法として、大学と地域・自治体などによる包括連携協定事業がある。

そこで本研究では、短期大学教育資源を活用したアウトリーチ活動にはどのような地域貢献効果があるのかを明らかにすることを目的とする。大学のアウトリーチとは、大学教育資源が地域・文化施設等へ出向くことによって、各種活動への参加、講演や研修の実施等を行うことである。本研究では具体的な活動と研修実施主催者を対象とした調査から、その有用性・有益性について分析を行った。

### (2) 本学における包括連携協定の概要

大学と地域・自治体等との包括連携協定の目的は、双方の知的・人的・物的資源の交流であり、

所属および連絡先

\* 大阪千代田短期大学      \*\* 大阪千代田短期大学 分担著作

相互資源・機能を活用することによる地域社会発展への寄与である。本学における包括連携協定を表1に示す。

表1 O短期大学包括連携協定一覧 (2024,10 現在)

年月日	締結先	締結内容
2012年10月	河内長野市教育委員会	教育などの分野において連携、総合協力
2014年7月	河南町教育委員会	教育・保育などの分野において連携、協力
2021年2月	阪南市	包括的に相互間の資源や機能の活用
2021年9月	河内長野市及び高野山大学	幼児教育・保育・福祉分野において知的、人的、部分的資源交流の促進、相互間の資源や機能の活用
2023年1月	和歌山県かつらぎ町	介護予防、子育て支援、生涯学習などについて、知的・人的・物的資源の交流を促進、相互の資源や機能等の活用

## 2. 方法

(1) 本研究調査対象となる活動・対象者

1) K町立Nこども園園内研修 (20\*\*/6~20\*\*/6:計3回) 参加者(保育士)。

2) K町児童館主催「ゲーム大会」(20\*\*/08:1回) 主催・運営・実践者、活動支援者。

それぞれの活動の実施時期と概要を、表2に示す。

(2) 調査実施期間:20\*\*年8月~10月

(3) 調査方法:対象者に対する活動認識、大学

との協働関係性に関する定量・定性調査。

1) 定量調査:Web 質問紙 (Google Forms) 5件法および自由記述で構成。

・質問項目作成手続き:国立青少年教育振興機構「青少年の体験活動などに関する意識調査(平成28年度調査)報告書」<sup>2)</sup>を基に質問項目を作成、尺度水準の妥当性を確認後実施した。調査フォーム画面冒頭では調査概要の説明および協力は、調査協力者の自由意思によるものであること、フォーム送信後の撤回は不可であることを明記した。また、氏名・メールアドレスなど個人情報収集せず、匿名性を担保した。なお、本調査は現在進捗中ではあるものの、統計分析上有効な母数にはまだ達していない。そのため、本稿の分析・考察対象からは除外した。

2) 定性調査:対象者に口頭で調査概要および調査協力に関する説明後に同意が得られた以下8名をインタビュー調査協力者とした。

a. グループインタビュー:

児童館活動支援者4名

方法:フォーカスグループインタビュー。

表2 本研究調査対象となった活動

実施主体	実施日時	テーマ	概要
K町立N子ども園 園内研修	20**/6	ロール版画で遊ぼう! ~絵やかたちをねんどに うつすあそび~	造形表現の意義説明(5分程度)その後ロール版画を紹介。 ①絵を描いて写す方法②好きな形に切って写す方法見本提示。 その後グループ(保育士3~4人)でロール版画を用いた遊び について園児の姿を想像しながら制作し全体で共有した。
	20**/12	クリスマスオーナメント を作って飾ろう!	クリスマスは子どもにとって大切な日、特別な日であることを 絵本を通して紹介(10分程度)。その後グループ(保育士3~4 名)でクリスマスオーナメントの制作。 準備物:松ぼっくり、シール、リボン、厚紙、色画用紙、毛 糸、綿など。同一テーマ作品であっても、素材を変えること によって温かみを生み出すことができるなど助言。実践場面 をイメージしながら制作し全体で共有した。
	20**/6	ローラーで大きな紙に描 こう!~個人作品を 共同制作へ~	個々の作品を大きな紙に貼り合わせることによる共同制作を紹介。 その後、造形用のローラー遊びを応用し、グループ(3~4 名)でテーマを決め、型紙を使ったステンシルを用いて模造紙 に制作。それぞれの表現作品を共有した
0短期大学とK町による 地域包括連携協定事業	20**/8	児童館ゲーム大会	例年K町教育委員会主催「児童館ゲーム大会」に、0短期大学 学生(5名)・教員(1名)が活動企画・運営・支援者として 参加。折り紙コーナーと昔遊びコーナーを設営・実施。大学生 と子どもと触れ合いながら一緒に遊び楽しむ姿が見られた。

所要時間：55分

b. 個別インタビュー：

保育者4名（保育士3名、園長1名）

方法：半構造化面接法による個別面接。

所要時間：1件あたり30分

・データ分析方法：

フォーカスグループインタビュー<sup>3)</sup>では、複数の話者が共通のテーマで他者の発言内容を聴きながら相互に影響し合い展開する。そのため、大谷(2018)が提唱するSCAT (Steps for Coding and Theorization) 法<sup>4)</sup>を用い、4段階コーディングを用いたストーリーライン、理論記述、さらに追求すべき点・課題を整理し発話構造を分析した。個別インタビューでは、個の発話の特徴を構造化するために、User Local AI テキストマイニングにて発話中の共起キーワードを抽出し構造を分析した。

(4) 調査協力者への依頼と同意の手続きおよび倫理的配慮

調査協力者選定段階において、本研究の目的・方法に関する事前説明を行なった。その上で、調査協力者に対する個人情報および人権の保護に関する具体的な方法、調査目的・内容、収集データの保存期間・破棄方法、調査協力の自由と撤回の権利について、文書と口頭で説明し同意を得た。同意書は2部作成し、調査協力者と研究代表者それぞれが保管した。本研究計画は大阪千代田短期大学研究倫理委員会承認済みである(2024研-5)。

### 3. 結果

定性調査：

a. フォーカスグループインタビュー

活動に関する特徴的な発話事例と、SCAT法による分析例を表3に示す。

<特徴的なエピソード発話例>

1) 学生の影響についての語り事例

そうですね。やっぱりなんか、普段児童館にもけん玉とかコマとか置いてるんですけど(子どもは)全然手をつけないんです。それで(当日むかしあそびは)どうか、と思っ

てたんですけど。学生さんたちの声かけとかもあって、すごく好評だったんで。それからその後日、児童館に来た子が、けん玉やりたいって。全然それまでやらなかったのに。やってるうちに上手になっていくんです。毎日やってたら、それで(うまく)できたら、あの(8月のゲーム大会の)お菓子釣り話(を思い出し)をしたり、色々(幅広い遊びを自発的に)やったりして。凄いなあと、(学生の影響による)子どもの力やなあと思いました。

活動前から児童館内に設置されていたけん玉が、活動後には活用され始め上達していくというエピソードには、体験的な学習の遅延効果が示されていた。

2) インタビュー内での相互的語り

(A・D：児童館支援者、I：インタビュー)

D：最後の方でかき氷(を振る舞った時)がね、その折り紙をやってる(子ども)のところに(学生が)ピタッとくっついて。かき氷(を食べよう)って声をかけたら、(子どもが)いやこれ(折り紙)やるからって。

I：後日ね、その学生に、なんで、あそこ(かき氷を勧められた)で中断しようと思わなかったんかって。それが(D)先生がおっしゃったのと真逆で、学生は子どもが一生懸命やっているから私が止めたらあかんと。

A：あーなるほど。うん、やっぱり(子どもと大学生が)お互いを感じるもんなんですね。(気持ちの)相互交流みたいなのが多分ね、そこで生まれてくるんですね。

折り紙に没入している子どもと学生は支援員からかき氷を勧められてもそれを断り2人で折り紙に熱中していた。その様子について、後日双方が確認した結果、それぞれの理由は異なるものの、子どもと大学生の間には作品を完成させるという共通目標による感情の相互交流が芽生えていた。

表3 SCAT法(大谷,2019)による発話分析の一部(著者作成)

発話NO	発話者	テキスト	(1)テキスト中の注目すべき語句	(2)テキスト中の語句の言い換え	(3)左を説明するようなテキスト外の内容	(4)テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	(5)疑問・課題
2	A	夏休みになると、長期の休みになって子どもたちの活動というか最近は大きな活動、子ども会がだんだんなくなってきて、妙寺内は仲いいんですけど、だんだん規模が小さくなってきてたりする。昔は夏休みに子供が(児童館)に行ってる集まって、いろんなことを、ゲームしたり食べたり、そういう活動するの(児童館)を使ってる地域や子供が多かったのが、最近それがなくなってきて。子供たちでもやっぱり子供たちにしたらそういう機会っていうのを望んでる子供たちもいるっていうのを、まあ(私たち)みんなが感じていて、その替わりではないんですけど、そういう機会を自分(私たち)で、人集まったらいいなチームをやるし、子供たちのごともよく知ってるし、あのことも広告なんです。校区の中にある児童館が一緒にあって、そういう子供たちに対して、そういう場を設けたいいなやうな感じが、まあ私たちの始まりで、去年度からしてるんです。そういうふうで、1年目はそうですね。ですから子供がだんだん来なくなってるんですけど、昔そういうのは子供たちもそうでしたけど、そういうのを楽しく夏休みにみんないっしょに集まって交流したとかいうのがなくなってきてる。できないのでそういう面でも子供たちがひとつひとつになって場を提供していけたらなあっていうのが始まりでねえいなんで、まだ正直2年目なので浸透しつつあるっていう今段階で子ども子供が集まってきたらいいなと思うんですけども。今まだそのね、進行中という場面での今回(大学生に)助けていたって。ちょっとまたこれで子どもたちも口コミで広がってほしい。	・長期休暇中の活動 ・子ども会がなくなってきつつある ・規模が小さくなってきつつある ・昔は夏休みに児童館に集まって色々な活動をしていて最近それがなくなってきている。 ・そういう(活動の)機会を望んでいる子どもも一定数はいる。 ・去年から実施している	・夏休み期間中の活動 ・子ども会など地域活動回数の減少と規模の縮小 ・過去と現在の違い ・活動機会を望んでいる子どもも一定数はいる。 ・校区の中にある児童館合同活動場の必要性 ・去年から実施している	・子どもを対象とした地域活動全体の規模の縮小という社会状況の変化 ・児童館活動衰退、現状 ・支援員の役割認識と現状に対する危機意識からの提案 ・児童館活動の意義と必要性	・児童館支援員は子ども遊びや学びを支援する役割 ・少子化や社会状況の急激な変化により、子どもを対象とした地域活動全体の規模の縮小という状況の変化 ・児童館活動の過去と現在の比較による現状課題認識 ・児童館活動の意義と必要性から、支援員は現状に対する危機意識と使命感を持っている	・支援員の公募方法や人材確保方法はどうかになっているのか。 ・児童館活動はどの程度子どもの居場所としての機能を持っているのか。
4	B	「ゲーム大会」をやることになったのは(Aさん)がお願いしていただいたおかげで。日頃は3館(それぞれ)こじんまりと過ごして、放課後過ごしてるんですけども、夏休みなので、4人できたらあつたというところから始まって、そこで今回は学生さんも来ていただいたのね。	・日頃は3館それぞれこじんまりと過ごしている。 ・夏休みだから3館合同でできる。 ・学生さんまで来ていただいて3館で集まると支援員4人でできる。 ・得意なことか知ってること ・交流できたらいいところがあります	・学期中は3館それぞれ独自の活動 ・夏休みは3館4名合同活動ができる	・支援員は各児童館に1名~2名配置されている(非常勤職) ・「ゲーム大会」は学生も参加できる	3館合同による夏休み「ゲーム大会」の計画 大学生の参加歓迎	・今回が2回目とのこと、何をテーマにするのかと打ち合わせも必要だったのではないのか。
6	B	やっぱり、あのそれぞれの館では、やっぱり一人です。一人で子供たちも見るっていうことですね。3館で集まると(支援員)4人で子どもたちも見るし、企画も4人でできるし、それぞれまあ得意なことか知ってる事とか交流できたりいいところがあります。とても勉強になります。	・3館で集まると支援員4人でできる。 ・得意なことか知ってること ・交流できたらいいところがあります	・複数の児童館によるメリット ・相互情報交流・協力	・日頃複数の児童館はそれぞれ独自の活動をしている。 ・夏休みだから3館合同イベントができる ・それぞれの担当者が得意なことを持ち寄り計画する	・複数の児童館交流・協働による夏休みのイベントは2年目。 ・現在は2館目。 ・現在は試行錯誤している	・支援員相互の信頼関係がある程度できているからできることなのか。 ・支援員ごとのキャラクターは活動にどのように反映されているのか。
8	C	そうですね、皆さんと同じような感じで夏休みは時間子供たちが来館して時間があるので。(夏休みは)長いこと遊べる(時間は)普段はもう放課後なんで時間ちよつとぐらいい時間取れないので。もう自分で遊んだり宿題したりするんですけど、時間がある中でいろいろなゲームをしたり、普段その児童館にはないゲームを持ち寄ってやるので、こういうゲームもあるよ、っていう感じでできた。(子どもが)行ったことない児童館のアービールとかにも、先生、こんな先生が(他の児童館には)いてはるんやで、っていうような、やったことないんで、あのアービールにもなったり、まあそうですね、夏休みのいい思い出つりになったので、うん、なんか(普段とは)違う児童館行ってる子ども達と遊べたり交流もできるんで、いい思い出つりになってほしいなあと思う。	・(夏休みは)長いこと遊べる(時間は)普段はもう放課後なんで時間ちよつとぐらいい時間取れないので。(子どもが)行ったことない児童館のアービールとかにも、先生、こんな先生が(他の児童館には)いてはるんやで、っていうような、やったことないんで、あのアービールにもなったり、まあそうですね、夏休みのいい思い出つりになったので、うん、なんか(普段とは)違う児童館行ってる子ども達と遊べたり交流もできるんで、いい思い出つりになってほしい	・日常の活動と夏休み期間活動との違い ・相互利用による他の児童館アービール ・普段通っている児童館では合わない子ども同士の交流のきっかけ ・いい思い出つりになってほしい	・支援員にとって夏休みの活動は普段あまり顔を合わせない子ども同士の交流のきっかけである ・夏休みの思い出の一つになって欲しいという思いがある	・夏休み「ゲーム大会」は3館合同イベントであり支援員同士の協同作業で成り立っている ・活動の主体である参加者(子どもと保護者)に、大勢が集まって楽しむ遊びの機会を活用してほしい ・遊びの体験活動では、日頃とは異なる子どもの姿も発見できる	・「ゲーム大会」は日常活動の拡大版なのか ・子ども・保護者の参加目的と「ゲーム大会」の方向性や内容は一致しているのか。
10	D	皆さんのおっしゃってくださった通りなんですけども。えっと、妙寺育成会ってすこし子供会じゃないんですけど、大きな団体になりますと、ちよつと予算がもらえるっていうか使えるんですよ。そこで、今回でしたらかき水とかちよつとお菓子が選べるっていうか、そういう子どもたちにとっては、その(遊びの)ゲーム以外の楽しみというかな、そういうのも効果的だったかなと思います。	・大きな団体 ・ちよつと予算がもらえる、使える ・今回でしたらかき水とかちよつとお菓子が選べる ・(遊びの)ゲーム以外の楽しみというかな、そういうのも効果的だった	・活動規模拡大によるメリット →一定予算が使える ・今回かき水やお菓子 ・子どもにとっては、ゲーム以外の楽しみ ・そういうのも効果的	・「ゲーム大会」主催者は教育委員会であり、実践主体は児童館支援員という枠組み ・夏休みイベントとしての予算配分がある ・それが子どもにも還元される(お菓子・かき水)	・夏休みの「ゲーム大会」予算の一部は参加者へ還元されている(お菓子・かき水) ・子どもは遊びだけが目的ではなく、他者との交流やお菓子・かき水を目的に参加している側面もある	・予算によってイベントの規模・内容は変動するのかな
12	D	普段は学校から、基本的には学校から家に帰って自由に児童館に遊びにくると、そこでまああの場所はあるんですけども、その遊びの中身は限定はされてなくて、まあ広い家に来たみたいな感覚で。(児童館)中でちよつと遊びたいかあるんですけどね。積み木が置いてあった積み木遊びするし、けん玉が置いてあったけん玉遊びをする。我々の(役割)は(遊び)道具を置いてあげてっていうか、それ(道具)を見て自由に遊んでるっていうのが、日頃の(子ども)の様子で、それと、高学年から低学年まで、たまたま一緒に遊んだ子どもたちが何人か一緒に遊べるっていうか、そういうよさもあるかなあと思うんですけど。	・基本的に学校から家に帰って自由に児童館に遊びにくると、そこでまあ広い家に来たみたいな感覚で。(児童館)中でちよつと遊びたいかあるんですけどね。積み木が置いてあった積み木遊びするし、けん玉が置いてあったけん玉遊びをする。我々の(役割)は(遊び)道具を置いてあげてっていうか、それ(道具)を見て自由に遊んでるっていうのが、日頃の(子ども)の様子で、それと、高学年から低学年まで、たまたま一緒に遊んだ子どもたちが何人か一緒に遊べる	・児童館への立ち寄り一旦帰宅の来所と直接来所 ・広い家に遊びに来たという感覚 ・支援員の役割は、遊び道具を置いてあげる ・高学年から低学年まで、たまたま一緒に遊んだ子どもたちが何人か一緒に遊べる	・普段の児童館活動では館内に設置された遊具や児童館文化財を活用した遊び ・支援員の役割は場の環境構成であり子どもとの立場から楽しそう遊びを作ること ・家庭的な雰囲気	・子どもにとって、児童館への立ち寄りはちよつと広い家のお家へ遊びに行くのと同じようなイメージ ・たまたま一緒に居合わせた子ども同士による異年齢・異学年交流はできる場所	・子どもとのベースに合わせた運営のようだが、館内ルールはないのか ・何を遊べばいいかわからない子どもに対してどのような支援が可能なのか
14	A	(DさんとAさん)の2人で一つの感じなんです。まあ小学校に近いっていうことまあ館の中でやっぱり小学校が一番近いところで、まあ子供も平日はやっぱりね、授業の終わりがみんなバラバラなので、私の担当の時は割と遅い時間に来たら、ほんまに1時間ぐらいいか遊べないし、特別にその月々に、まあ今やたらハロウィンとかだったら、みんなが集まるとみんな一緒に、やっぱりうちの(児童館)では無理なんです。ですから何日か何日でもハロウィン期間とかいう感じで、そこで物を作ったりちよつと食べられるものを作ったりっていうふうで、もう(子ども)みんな終わる時間がバラバラなんで、夏休みみんな一緒に(集団)はできるんですけども、低学年が(児童館)に来たら(別の)学年が来て、バラバラになっちゃうんですけども、期間を置いていろんなことをしたり。	・小学校に近い ・(普段は)学校帰りなので)1時間ぐらいいか遊べないし、特別にその月々に、まあ今やたらハロウィンとかだったら、みんなが集まるとみんな一緒に(集団)はできる	・児童館の地理的環境 ・日常と夏休みの利用状況の違い ・夏休みは集団を形成しやすい	・小学校と児童館の地理的な距離が、児童館利用者増減にも影響を与えている ・夏休みは子どもの遊び場園居場所にもなっている ・異年齢・異学年の子どもにもよる集団活動などもしやすい	・個々の児童館が持つ地理的条件や環境によって、参加者数・内容が異なるのか ・夏休みは一定人数規模による時間・参加者となるので、集団活動も取り入れやすい	・3館それぞれの独自性や方針がある場合、どのレベルで協働が可能なのか ・何をして遊ぶのか ・「ゲーム大会」における4名の支援員の役割分担はどうか
18	B	勉強勉強?今はもうね、あの学校近いんでランドセル背負って学校から(子どもが)児童館に来て、そこで宿題したり、今はワクワクしてるっていうのは水曜日なんですけど、子供らがランドセル背負って、宿題したりとか、勉強したりっていう時間はありますけれどもちよつと	・学校から(直接子どもが)児童館に来る ・宿題したり宿題 ・水曜日はワクワク塾	・児童館での活動内容 ・宿題や遊び ・学習支援	・児童館での活動内容には、支援員のキャラクターや好み、特技などが反映されている ・遊びが主であるが、宿題や学習支援のニーズは高い	・子どもにとって児童館利用は一チームのルーティンである ・支援員は基本的には見守りが中心だがそれぞれのキャラクターや好みに合わせて館内環境構成を行っている	・3館それぞれの独自性を活かす協働関係をどう構築できるのか



20	B	そうですね。もう寝転がっている。遊びに来たときは寝転がって本を読んでいた。ぎゃーって走り回ってたり。規制はしてないもんね。絶対これしたらあかんっていうことだけ以外、もう怪我した大きいことあるけど。まあそれ以外は喧嘩することもあつて野放し。	・寝転がる ・本を読む ・走り回ってみたりする ・絶対これしたらあかんっていうことだけ以外は見守る ・喧嘩 ・(安全を確保した)野放し	・児童館での過ごし方 ・自由度の高さ ・危険行為は制御する ・その上で自由度を保障する	・グラウンド ・バスケットボール・AH ・新聞紙で作るボールで野球 ・工作や制作 ・子どもの人数が減ってきてる ・来館者数も少ない ・家ではこれやったらあかんこととか多かった ・児童館は怪我とか危ないことはダメ ・ダンボールで家を作る ・(作ったものは)もうそのまま置いて帰って次の日来てその続きをしたりできる ・児童館では、なるべく家でできないこともやらせてあげよう	・児童館の役割は子どもの居場所と安全を確保すること ・基本的に何をしてもよい ・子どもにとっては自分の存在と自由が大人に見守られている場所	・子ども同士のいざこざやトラブルに対する指導員の対応基準は共通したものであるのか
24	C	あの児童館で、今学童保育ってあると思うんですけど、学童保育は出席をとって絶対行かなあかん場所ですよな。	・学童保育は出席をとる ・絶対行かなあかん場所	・児童館と学童との違い	・児童館の目的、子どもに健全な遊びを与えその健康を増進しまたは情操を豊かにする	・児童館は学童関係とは目的が異なり、遊びを通して子どもの健康増進、豊かな情操を育む児童福祉施設	・児童館の独自性がどの程度社会的に認知されているのか
26	C	そうですね。子どもさんが行っておうちのかたが迎えに行く時間までまあおるっていうで。その中で、なんか色々されてると思うんですけど、児童館は自分の意思で来て自分のやりたい時に帰ってもよい、という感じなんです。だから、(児童館に)来たら、先ほどからありましたように、もう(子どもが)自分で帰しようかって、それでうち(の館で)は、ボードゲームする子とか、あの布ボールでドッジボールしたりとか、卓球したりとか、自由に寝転がっているような子もあつてんですけど、そうですね。あとはまあ工作、折り紙をちょっとしたりとかして、まあ時まで過ごすっていう感じ。	・児童館は(子どもが)自分の意思で来て好きな時に帰ってよい場所 ・ボードゲーム ・布ボールでドッジボール ・卓球 ・自由に寝転がっている ・工作や折り紙	・児童館は子どもが自分の意思で通所できる ・滞り時間制約がない ・好きな時に来て好きなように遊び(学び)好きな時に帰ってもよい ・放課後の子どもの居場所	・児童館の活動は複数館合同実施の方がよいのか	・児童館の目的・特色を生かした環境構成には物的・人的環境によって成り立っている ・好きな時に来て好きなように遊び(学び)好きな時に帰ってもよい、自由度の高い子どもの居場所	・日常児童館の活動は各館実施だが、複数館合同実施の方がよいのか
30	D	それぞれ(児童館の)管理は特徴があつて、うちの児童館は小学校から一番遠いんですけど、えっと、グラウンドがあるんですけど、えっと、バスケットゴール(を町から)買ってもらってあるんで、外でバスケットしたり、野球みたいな、新聞紙で作るボールなんですけど、野球したりもできるんです。それで、児童館の中では、あの工作とか私は別に得意なんじゃないんですけど、工作、今の時期)やったら、それこそハロウィン工作とか、敬老の日でおばあちゃんおじいちゃんにプレゼント作ったりとか、おやつ作り、子供たち凄く喜んで、(色々な)企画をやっています。それで、もうちょっと昔は、子供たち(の)人数も多かったんですけど、今子どもの人数が減ってきてるんで、ちょっと来館者数も少ないんですけど、それと来てくれた子には、そうやって、自分で遊べる子や、遊びの思いつけない子には(支援者が)工作を、これするかとか、ちょっと簡単に作れるおもちゃみたいな感じで進めたりして、見守るようになって。私が思うのは、(子どもの)家では、子供にやったりこれやったらあかんとか家の中でやったらあかんこととか多かったんですけど、児童館はまあある程度怪我とか危ない(ダメな)ことはダメなんですけど、たとえばダンボールで作ったりなんか、(子どもが)作ったものはもうそのまま(児童館内に)置いて帰って、次の日また来てその(ダンボールの)家で続きをしたり遊んだり、だから児童館では、なるべく家でできない安全なこともやらせてあげようかって思っているんです。やっぱり子どもさんはね、自由に遊べる遊びって、何かをしなくちゃいけないじゃないやなくて、自分の好きなこととか。	・グラウンド ・バスケットボール ・新聞紙で作るボールで野球 ・工作や制作 ・子どもの人数が減ってきた来館者数も少ない ・ダンボールで家を作りそのまま置いて帰って次の日来てその続きができる ・児童館では、なるべく家でできないこともやらせてあげよう	・児童館活動の具体例 ・少子化による来館者の減少 ・支援員による指導の基準 ・家庭ではできない遊びの自由 ・継続性の保障 ・筆塵では制約がありできない遊びを保障する	・実際に各館で実施されている具体例が示されているが、管の設置状況によって内容にはかなりの差がある ・ある放課後の時間内に完結しない遊び(段ボールで家を作る)が翌日まで保護されている ・前日の活動の続きができることが、翌日の来館動機になっている ・定期的な来館ルーティンが居場所として安定感を与える	・放課後子どもが毎日来館する動機のひとつに、活動の保護と継続性がある ・遊館時刻で遊びがリセットされるのではなく、翌日(続き)ができることが、子どもにとってはメリット ・児童館にとっても、利用者数の安定・増加につながるため、継続性のある遊びの環境保護は重要	・1日の終わりに片付けをしなくてもよい環境構成は、家庭では困難ではないか ・片付け習慣が緩くなるデメリットが家庭や学校で出ているのではないかと
ストーリーライン (現時点で言えること)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夏休みに子どもたちが集まる機会が減少している。昔は児童館でのゲームや交流が盛んだったが、最近はその規模が小さくなっていることが指摘されている。</li> <li>・子ども会が、だんだんなくなりつつあり、支援員は新たな試みを検討し地域の児童館が協力し、子どもたちに交流の場を提供する取り組みである。</li> <li>・夏休みの「ゲーム大会」はその試みのひとつである。</li> <li>・児童館支援員の役割は、複数の支援員が集まることにより、より多くの子どもたちを対象とした子ども向けイベントの企画・運営ができることを期待している。</li> <li>・児童館への来館は子どもも意思であり、館内では自由な遊びや学習ができる「3間(時間・空間・中間)」が保障されている。</li> <li>・「児童館は自分の意思で来て自分のやりたい時に帰ってもよい。」</li> <li>・創造的な活動(工作・おやつ作りなど)環境を提供することによって、子どもたちに喜ばれている。</li> <li>・支援員は、「工作とか私は別に得意なんじゃないんですけど、今(の時期)やったらハロウィン工作とか。」にも挑戦している。</li> <li>全体として、児童館は子ども同士の交流や活動の場であり、自由な遊びを通じて子どもたちの成長を支援することが支援員の役割である。</li> </ul>						
理論論述	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の少子高齢化による児童館利用者数が減少傾向にあること、子どもを取り巻く環境の急激な変化から、子どもの本質や遊びの環境が限定されている</li> <li>・子ども同士の異年齢交流機会の減少、多様な個性や特性を持った人どうしともに活動する機会や場の減少によって、基本的対人関係形成スキルの低下や社会適応上の課題につながる可能性についての懸念がある。</li> <li>・個々の支援員の自助努力だけでなく、教育行政や大学との連携をさらに強化する必要がある</li> </ul>						
さらに追突すべき点・課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育行政と児童館、包括連携協定を結んでいる大学の三者の関係性について、それぞれの職分は役割分担はできていそうだが、協同性や相互理解の点においては課題がある</li> <li>・今後定期的な相互のコミュニケーション機会を増やすことにより、次年度計画の改善につながることを期待したい。</li> </ul>						

b. 個別インタビュー

User Local AI テキストマイニングによりそれぞれの発言について共起キーワードモデルを作成した(図2~4)。以下、誌面の都合で3名(保育者2名、園長1名)の語りの概要を示す。

1) 保育士 A (2歳児担任) 語りの概要

①研修の目的：クラスにいる子どもたちが楽しんで参加できること、多様な特性を持つ子どもたちに配慮した計画を立てる。

②子どもたちの反応：昨年の3歳児の造形活動指導について、子どもたちから「虹みたい」という言葉が出てきた。色の変化を感じたことが比喩的な表現になったことが驚きであり喜びであった。

③保育の多様性：「保育には正解がない」と述べ、情報交換や交流を通じて保育の幅を広げる重要性を語る。「お互いに分かり合える関係性ができれば」と研修への期待が示される。

④研修の捉え方：研修は「教えてもらうもの」と

して捉えられがちだが、実際には「教えてもらっていることが多い」との認識があり、受講者間の対等な関係でのアイデア交換が重要である。  
⑤今後の保育に対する意見：研修が「しんどいもの」と感じられることがある一方で、「一緒に何かを作っていこう」と考えることが重要である。子どもたちに対する接し方を学ぶことが基本であり、今後も学び続けたいという意欲が伺える。

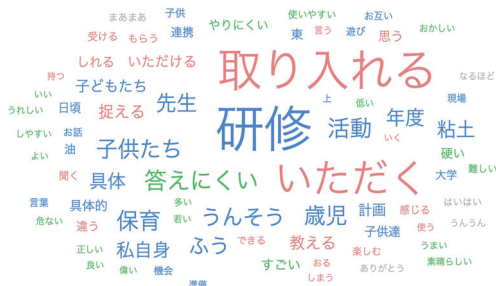


図2 保育士 A の語りワードクラウド

## 2) 保育士 B (クラス担当なしフリー)

### 語りの概要

①研修の目的と期待：研修を通じて、子どもの年齢に応じた制作の仕方や造形活動のアイデアを得たいと考えて参加した。

②研修の内容と成果：研修では、色彩技法やグループ活動を通じて新たな発見があり、「わかっていただけでも改めて気づいたことが多かった」と述べている。

③グループ活動の重要性：研修内容だけではなく、教員同士によるグループ活動が「楽しくできました」と発言し、実際に制作した作品が、秋の活動に活用できることを喜んでいる。

④教育現場の変化：最近の教育現場の変化についての話題から、若手の先生方とのコミュニケーション

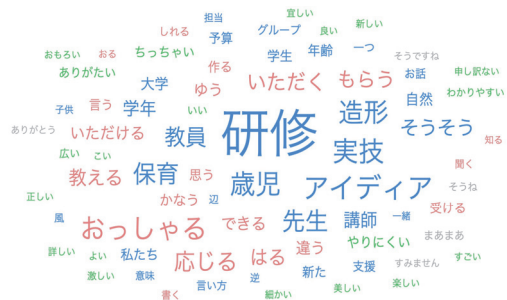


図3 保育士 B の語りワードクラウド

ンが難しいと感じている。

⑤地域との連携の重要性：教員同士の交流や専門的な相談ができる機会を増やしたいと考えている。

### 3) 園長 C 語りの概要

①研修の目的：職員が実技的なことを学び、子どもたちに役立つ内容を提供することが重要と考える。

②研修の効果：職員が研修を通じて実際に活動を体験し、その経験を基に子供たちに指導することができる点がよかった。

③学生との連携：大学と園の連携について、学生がボランティアとして関わるができる機会が園にとって必要である。

④実習の重要性：ボランティアや実習を通じて、学生がやりがいを感じ、保育者・教員としての道を選ぶことが多い。実習の受け入れの重要性を感じている。

⑤感謝の意：今後の大学との連携についても期待を寄せている。学生ボランティアは歓迎したい。研修は大学と地域の保育施設との協力関係を深める活動であり、実践的な研修を通じて、職員だけではなく子どもたちにもよい影響を与えると考えている。

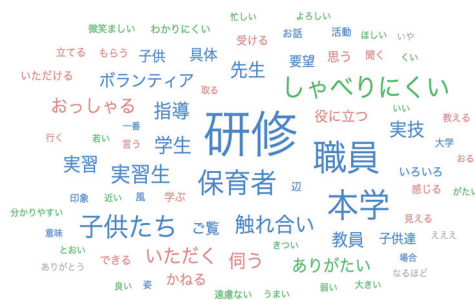


図4 園長 C の語りワードクラウド

## 4. 考察と今後の課題

「夏休みゲーム大会」は、K 町児童館支援者 4 名と、その仲介役となっているのは K 町教育委員会事務局による協働作業である。また、4 名は過去にも相互情報交流や協働によるイベントも複数回開催していた。このように、調査協力者間の基本的信頼関係が形成されてたいことから、フォー

カス・グループインタビューは妥当な方法であった。開始直後はやや緊張感があり、インタビュアーが司会進行的な役割を担い、他の参加者はその内容を聴きながら自分の発言内容を調整していたようだった。しかし、徐々に意見交換が進み、「夏休みゲーム大会」に関する具体的なエピソードの想起と、事後の各館における様子が語られはじめた。また、事実関係を確認し合いながら体験を意味づけようとする場面も見られた。これらは、事実関係そのものを語っているわけではなく、インタビューを受けることによって、過去の記憶を想起・再構成するというメタ的な思考過程を展開していた。4名は、子どもと関わり何かを「教える・支援する」役割を担う立場であるのと同時に、子どもや同僚、保護者や地域の人々と日々関わり、そのやりとりを通して様々なことに気づき、それらを省察 (reflection) する学びの主体でもある。

一方、Nこども園保育者3名・園長1名計4名の調査協力者個別インタビューでは、「研修」に対する一定の共通認識、大学との包括連携協定に対する有用性が示された。調査協力者にとって「研修」は、現場保育実践に即応する知識や技能の習得であり、具体的な実践事例を自分の実践に応用するための捉えられ方である。結果的には保育者自身の学びにもつながっていると考えられる。

保育・教育実践者が事前に入念な計画・準備をした設定や展開が、実践場面ではうまくいかないこともしばしば起こる。このような場合、「実践内容や方略を修正するだけではなく、状況に合わせて自らの認知的枠組みや葛藤・困難感を微調整・修正しながら臨機応変に対応・対処する柔軟性も、実践現場では求められる」(石上、2014)<sup>5)</sup>。この実践スタイルは、D・ショーンの提唱した省察的実践家モデル「行為の中の省察 (reflection-in-action)」に相当するだろう。ショーンによると、「不確実性、不安定性、独自性、そして価値の葛藤という状況で実践者が対処する“技法”の中心をなすものは、“行為の中の省察”というこの過程全体である」という (Schön, 1983; 佐藤・秋田, 2001)<sup>6)</sup>。

今後の課題は、個々の実践者自身の省察から自己評価、指導方略改善のための PDCA サイクルの活用、実践的連携協力・研修内容の充実が求められるだろう。また、保育士・教員養成に携わる大学には、より主体的に連携事業を推進・交流することが望ましい。

#### <注>

- ・User Local AI テキストマイニング：(株) ユーザーローカルが開発したクラウド上で動作するテキストマイニングソフトウェア (ライセンス契約)。
- ・本研究は令和6年度大阪千代田短期大学共同研究費による。

#### <引用文献>

- 1) 中央教育審議会大学分科会 (2021), これからの時代の地域における大学の在り方についてー地方の活性化と地域の中核となる大学の実現ー (審議まとめ) [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360\\_00007.html](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360_00007.html) (2024/10/20 閲覧)
- 2) 国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター (編) 青少年の体験活動等に関する意識調査報告書 (平成28年度), p156. <https://koueki.net/user/niye/110356474-2.pdf> (2024/10/20 閲覧)
- 3) S.ヴォーン・J.S.シューム・J.シナグブ著、井下理・田部井潤・柴原宣幸訳 (1999) 『グループ・インタビューの技法』慶應義塾大学出版会, pp55-69.
- 4) 大谷尚 (2019) 『質的研究の考え方ー研究方法論から SCAT による分析まで』名古屋大学出版会, pp 270-333.
- 5) 石上浩美 (2014) 「教員の職務認識と教職キャリア形成に関する研究」京都精華大学紀要, 45, pp.3-21.
- 6) Schon, D.A.(1983) The Reflective Practitioner: How Professionals Think In Action. BasicBooks, 佐藤学・秋田喜代美訳 (2001) 専門家の知恵ー反省的実践家は行為しながら考える?』ゆりみ出版, p78.

#### <参考文献>

- 樋口一成編著 (2018) 『幼児造形の基礎 乳幼児の造形表現と造形教材』. 明文書林, pp.190-191.



## 資料1 調査協力依頼書

### 「短期大学教育資源を活用したアウトリーチ活動による地域貢献効果に関する研究」

#### 調査ご協力をお願い（依頼状）

謹啓 時下、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

本研究代表者（石上）及び分担者（東）は大阪千代田短期大学にて保育士養成に携わる大学教員として、「短期大学教育資源を活用したアウトリーチ活動による地域貢献効果」をテーマに調査研究を計画しております。大学教員が、それぞれの専門性を基に課外活動や地域連携事業、学校園研修などを担当することは多数ございます。本学においても、自治体包括連携協定による子どもを対象とした地域連携事業の企画・運営、学校園保育者・教員対象研修への講師派遣、高大連携事業などを実施しております。これらの活動については、その実施経過報告や考察的なレポートは多数見られますが、その後の効果や参加者の変容過程について追跡的に検証した研究はあまり多くはございません。

本学には、専門性の高い保育者や対人援助職を養成する教育機関であると同時に Society5.0 社会における生涯学習拠点として地域の活性化を担う社会的責務があると考えております。そこで本研究では、保育・教育実践活動や研修を対象とした地域に対するアウトリーチ活動（大学教員・学生が地域文化施設や学校園等に出向き子どもや大人を対象とした講座の活動支援、保育内容・授業研究講演や研修）参加者を対象に、大学教育資源を活用したアウトリーチ活動にはどのような地域貢献効果があるのかを明らかにすることを目的とします。

本研究では、よりよい保育・教育実践や研修を作りその効果を検証するためにアクションリサーチ法など心理学的な手法を用いた Web アンケート調査（定量調査）とインタビュー調査（定性調査）を計画しております。その結果を分析・考察し、ご協力いただいた学校園の先生方や自治体ご関係のみなさま方と情報を共有することによって、アウトリーチ活動を通して今後の保育・教育実践及び保育士・教員養成及び地域課外活動支援に貢献したいと考えております。本研究の趣旨を十分にご理解いただいたうえで、ご協力をご検討いただけましたら幸いです。ご不明な点がございましたら遠慮なくおたずねください。

#### 【調査方法・内容】

1) 定量調査：アウトリーチ活動参加者、活動実施主催者対象活動効果に関するアンケート調査

方法：Web 回答方式（Google Forms）5 件法および自由記述による質問紙（所要時間：15～20 分）

国立青少年教育振興機構「青少年の体験活動などに関する意識調査（平成 28 年度調査）報告書」を基に質問項目を作成、予備調査にて尺度水準の妥当性を確認後、研修・活動事後に実施します

2) 定性調査：アウトリーチ活動参加学生、活動主催者を対象とした事後インタビュー調査

方法：半構造化面接法。研修・活動参加後のエピソード聴取

調査所要時間・方法：1 回約 30 分間程度。発話内容は IC レコーダーとビデオで記録します

・対面または Zoom 等オンライン形式での実施

・対面の場合は大学施設内または調査協力者と相談の上任意の場所を設定



**【調査期間】**

20\*\*年\*\*月\*\*日～\*\*日

**【調査の対象・実施場所】**

- ・調査をお願いしたい方：本研究代表者及び分担者が関わるアウトリーチ活動参加者（保育者・教員、研修主催者、活動参加者本学学生） ※活動参加者（幼児・児童）は対象外です
- ・調査実施場所：大阪千代田短期大学内外施設・活動実施学校園・保育・教育行政運営機関等
- ・調査協力者謝金：薄謝（インタビュー調査）

<インタビュー調査について>

- 1) 記録した音声・画像などは、後日文書データとして分析します
- 2) インタビューは上記施設においてプライバシーが確保される場所で行います
- 3) 音声・画像データは大学倫理委員会規定に基づき厳重に保管します
- 4) 音声・画像から作成したテキストデータは匿名化し回答者が特定されない形で保存します
- 5) 音声・画像・テキストデータ等個人情報は研究代表者所属機関にて5年保存後破棄します
- 6) 本調査にご協力いただける場合は、別紙同意書への署名をお願いします
- 7) インタビュー調査日程は後日ご相談とさせていただきます（オンデマンド対応・調整可）

**【調査協力者の権利】**

- 1) 調査へのご協力はお一人お一人の自由意思によるものです。調査にご協力いただけない場合でも不利益を被ることはありません。また、同意後いつでも同意を撤回することができます
- 2) 本調査により得られた情報やデータが、研究以外の目的で使用されることはありません
- 3) 個人情報の保護には十分留意しデータは鍵のかかる場所で保管、終了後は安全に破棄します
- 4) 事前説明後においても本調査に関するご質問などがございましたら、お手数ですが下記連絡先までご連絡ください

**【結果の公表について】**

本調査の結果は、学会および学術論文・学位論文などで公表する予定です。その際には、個人が特定されることはありません

**【研究責任者及び研究分担者の氏名と連絡先】**

研究責任者：石上浩美（大阪千代田短期大学幼児教育科准教授）

分 担 者：東 景子（大阪千代田短期大学幼児教育科講師）

**【本研究に関する連絡先】**

大阪千代田短期大学 幼児教育科

〒586-8511 大阪府河内長野市小山田町 1685

Tel：0721-52-4141(代表)

E-mail：石上浩美 ishigami@chiyoda.ac.jp

東 景子 higashi.k@chiyoda.ac.jp



短期大学教育資源を活用したアウトリーチ活動による地域貢献効果に関する研究

インタビューガイド

1. 活動の目的・目標

今回の活動（研修）計画について、主催者（運営者・実践者・活動支援者）として、どのようなねらいがあたりだったのかをお聞かせいただけますか。

2. 活動の印象

今回の活動（研修）全般について、主催者（運営者・実践者・活動支援者）として、どのような印象を（ご感想やご意見で結構です）お聞かせいただけますか。

3. 活動の評価

1) 今回の活動（研修）内容の中で、主催者（運営者・実践者・活動支援者）として、よかったと思われた（感じられた）ところはどのようなところだったのかお聞かせいただけますか。

2) 今回の活動（研修）内容の中で、主催者（運営者・実践者・活動支援者）として、改善した方がよいと思われた（感じられた）ところはどのようなところだったのかお聞かせいただけますか。

4. 今後の主催活動に対する展望

今回の活動（研修）をふまえて、主催者（運営者・実践者・活動支援者）として、これからどのような活動（研修）ができそうなのかお聞かせいただけますか。

1) 今後の活動についての大学との連携・協力

2) 今回の活動（研修）をふまえて、主催者（運営者・実践者・活動支援者）としてこれから大学とどのような連携・協力ができそうなのかお聞かせいただけますか。

5. 今後の大学主催活動への要望・意見

今後大学が実施する学外教育・文化活動（アウトリーチ活動）について、主催者（運営者・実践者・活動支援者）としての、ご要望やご意見などがございましたらお聞かせいただけますか。

6. まとめ：今日はとてもよいお話をお聞かせいただきありがとうございました。

もう少しお話になりたいことがございましたらお聞かせいただけますか（数分程度）。

本日は調査へのご協力、本当にありがとうございました。